

オルタナティブ労働としての地域活動 ——子育て支援を目的としたO会の活動休止を事例に——

九州大学比較社会文化学府博士後期課程 里村和歌子

1 目的

これまで報告者は、既婚女性の自発的な労働、具体的にはハンドメイド作品を制作し販売する主婦たちや子育て支援のソーシャルビジネスに携わる主婦に注目することで、既存の労働観を押し広げ、1) 雇用されない、2) 労働の対価を得ている、3) 公的領域と私的領域の境界であるグレーゾーンに位置する労働について、「オルタナティブ労働」と定義してきた。本報告ではさらに視野を広げ、賃金の発生しない地域活動をもオルタナティブ労働として位置づけ、活動を休止した事例と継続している事例とを比較検討することでオルタナティブ労働の輪郭をより明らかにすることを目的とする。

2 方法

そこで、対象をO会、そして比較事例としてT会をとりあげる。O会とは、F市立M小学校区にあるO2丁目子ども会とO2丁目町内会が「F市地域ぐるみ家庭教育支援事業」の助成を受けるために2013年に共同で設立した組織である。T会も同地域で同助成を受け同時期に始まった。O会は活動開始から2年後、O2丁目子ども会の判断で休止することになった。本報告で使用するデータは2014年4月から2015年3月まで行った参与観察と活動休止後に行った半構造化インタビューデータである。

3 結果

分析の結果、O会が活動を休止した最大の理由はO2丁目子ども会を担う主婦たちにとって家庭や雇用労働と比しての、地域活動の優先順位の低さだということがわかった。O会の活動はもちろん雇用関係がなく賃金も発生しないが、大企業の役員経験者である町内会長との主従関係がはっきりしていたために、活動内容が非自発的、従属的なものにならざるをえなかった。つまり、O会では賃労働と同質の活動を要請されながらも、それに見合う対価が得られなかった。それがメンバーたちにとって地域活動の優先順位を低める大きな要因となったのだ。一方でT会は発足が同年代3人の「ママ友」であったため、O会とは対照的に水平的な関係性のなかで現在4年目の活動を続けている。

4 結論

以上からわかるように、同じオルタナティブ労働といっても組織のあり様によってその活動内容と継続性に違いが出る。組織のあり様とは、O会はジェンダー・バイアスのかかった町内会長との主従関係を基盤とし、T会は横並びの水平関係を基盤としているということだ。私的領域と公的領域の境界に横たわるグレーゾーンに位置する活動をオルタナティブ労働とするならば、O会の活動内容はあまりにも公的領域に寄りすぎて担い手たちに雇用労働に近いものとして認識された。にもかかわらず明確な対価がないことで彼女たちの不満がつり活動自体が休止に至ったのだ。とはいえこのケースは単なる一団体の失敗事例ではなく、今後の地域社会の運営を考えるうえでヒントを与えてくれる。つまり、地域自治や福祉の担い手として期待される地域の全日在住者の中からその担い手を確保していくためには、雇用労働とは別軸のオルタナティブな組織のあり様、そして成員間の水平的な関係性、もしくはその対価というオルタナティブ労働の条件こそが重要だという論点を提起する。

文献

森建資, 1988, 『雇用関係の生成：イギリス労働政策史序説』木鐸社。

玉野和志, 2002, 「都市町内会論の展開」鈴木広監修『地域社会学の現在』ミネルヴァ書房。